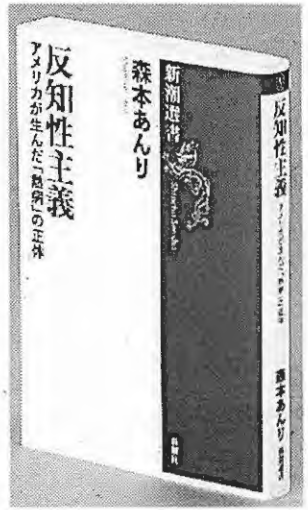
読書 BOOK

反知性主義

（新潮選書・1404円）



森本あんり著

■ヒリヒリする個人主義

ここ日本でも「反知性主義」という言葉をよく聞くようになった。ただ、これは元来、無教養や無知蒙昧（もうまい）を意味するものではない、と著者はいう。そのことを、18世紀からの米国の「信仰復興運動（リバイバリズム）」にみられた「反知性主義」の精神と実態を通して描き出そうとするのが本書である。

米国の建国は旧教と新教、すなわちカトリックとピューリタンの対立抜きに語れない。建国に貢献したピューリタンらは、旧大陸の影響から脱して自らの教義のため熱心な宗教運動を展開する。かのハーバード大も、当初は牧師養成のために建学されたものだった。

こうした宗教権力への草の根的な抵抗が米国の反知性主義の母体となる。本来はカトリック教会による抑圧からの自由を目指したピューリタニズムが、新天地で人々に規律を押し付ける知的権威となる。これに対して本来の信仰を取り戻すべきとする「反権威主義」が、米国の反知性主義の本性だ。知性への反感や批判ではなく、知性は万人にとって平等なものだとする聖書の原理的な解釈を推し進め、さらに、硬直化した権力を告発するのが真の反知性主義なのだ。こうした源流がまた、米国の大衆民主主義を生み出す原動力となる。

反知性主義とは個人の信仰の純粋さを追い求める態度であり、確固とした世界観に裏打ちされた、ヒリヒリするような個人主義の形でもある。一読すれば反知性主義を一蹴する態度こそ、〝反知性的〟だとわかるはずだ。

著者の宗教史についての博識を土台とした、米国の説教師から政治家、小説家や実業家に至るまで反知性主義の系譜に多くが連なることを紹介する記述は、現代にも多くを示唆する。宗教がショービジネスや自己啓発と結びついたり、信仰心とメディアの発達がともにあったりした歴史を描く本書は、なぜ世界的に宗教と反知性主義の時代を今になって迎えているのかを説明する一助になるに違いない。

（吉田徹・北海道大准教授）